

2017年
11月22日
水曜日

舟木 讓 教授(宗教哲学、キリスト教学)

「選別」への誘惑に抗う

世界が進んでいる。

アメリカ合衆国においてトランプ氏が大統領に選出されて以来、その言動がマスコミを賑わさない日がないくらい世界の情勢に影響を及ぼす活動が目立っている。その政治姿勢の本質を理解するのは困難であるが、アメリカ第一主義を標榜する中で、数々の分断を引き起こす可能性のある政策が実施されてきていることは確かである。またヨーロッパにおいてもイギリスがEUを離脱し、国と民族の垣根を越えた経済関係・協力への挑戦にほころびが見え始めている。アジアに目を向けてもミャンマー政府によるロヒンギャへの弾圧が強まり、多くの犠牲者が出ている。21世紀、「グローバル化」がますます進み国や人種、民族、宗教等々の壁を越えて世界が新たな歩みを始めることが期待されたにもかかわらず、ここ数年で急速に反対の方向に

その背景にある問題は複雑であるが、日本でも起こり今も継続しているヘイトスピーチに象徴されるように、ここには様々な形で人にレッテルを張り、「選別」していこうとする思いがその底流に存在しているように思われる。国籍・民族・人種・肌の色・言語・信仰・文化・思想・性的指向・経済状況などで人を細分化しグループ化して自らが属するグループに如何に有利な社会を形成するかに心を奪われているように感じられる。人を「選別」するというと一見傲慢な行動と思われるが、たとえば第二次世界大戦中のナチス政権下における政策はまさに人を生きる「価値ある命」と「価値無き命」に選別をする優生思想に基づく政策であったことを考えると、いつの時代

に起こつても不思議のない事柄であることに今、留意しなければならぬときに来ていることが分かる。ナチスドイツのいわゆる「優生政策」はヒトラーという一人の稀有な独裁者の暴走のように思われがちであるが、第一次世界大戦で敗戦し、プライドも傷つき、経済的にも大きな痛みを受けたドイツ国民が、そこから抜け出すために極めて近代的、民主的な方法で、具体的にはその政策を進めるための法律が提示されそれを承認する形で進められたという歴史的な事実をけつして看過してはならない。そこでは、生きる「価値のない命」とレッテルの張られた多くの人々が、最初は強制的な断種・不妊手術を受けさせられ、またユダヤ人とドイツ人の結婚が法的に禁止されるようになり、やがて、「価値のない命」に対する「安楽死」あるいは「慈悲殺」の名の下での殺人が

合法的に実行されるまでに至ったという史実を忘れてはならない。

私たちは同じような価値観、歴史、文化等を共有している人々とは安心して共生できるが、自らのあり方が問われるような関係はなるべく避けたいのが心情である。しかし、この世界で絶対的な善や悪といったものを決定することが出来ないという端的な事実が常に気づき、「選別」への誘惑と戦う不断の努力なしには、本当の平和と希望と救しにあり、多様性の豊かさに満ちた共生社会は出来ないということに、「選別」が加速する今日、改めて私たちは感覚を研ぎ澄まし意識して、今なすべきことを共に探求することが急務となっているのではないだろうか。